

希望者による哲学対話を通じて、 生徒の学習観やメタ認知能力の変容を検証する

田園調布学園中部・高等部 坂本 登

実践背景

【問題意識】

・「テストに出るから」「受験でつかうから」といったごくごく短期的で即物的な目的・目標で学んでいる生徒が多く、もっと長期的で抽象度の高い目的・目標—学ぶことそのものの価値や人生の意味など—を考える場が少ない。

・自分で問いを立てたり考えたりするなど、時間をかけて課題に向き合う場が少なく、すぐに答え(模範解答)を求めてしまう。

【ねらい】

・正解のない「哲学対話」を通じて、生徒自身が問いを立てたり、それについて授業を超えた取り組みのなかで考えたりすることの意義を体験することで、定期考査などの成績を超えた内発的動機づけの獲得を図る。

【目指す姿】

・生徒たち自身が、普段の生活の中で、自分自身を見つめられるような習慣が付き、学習に対しても自分で動機付けることができる。

実践方法

◆対象学年: 中2・高3の希望者

◆実践期間: 1学期・3学期のそれぞれ1回ずつ

◆実践内容: 希望者向けの哲学対話(主に放課後を活用)

【哲学対話の概要(使用スライドは別資料参照)】

◆進行役(ファシリテーター): 坂本(実践者)

◆テーマの設定: 基本的には進行役の坂本が設定

◆哲学対話のルールについて(抜粋)

- ①何を話してもいい。
- ②話さなくてもいい(ほかの参加者の話を聞くだけでも良い)。
- ③話した人に否定的な態度をとらない。
- ④結論を出そうとしなくてよい。
- ⑤途中で主張が変わってもよい。
- ⑥知識ではなく、経験に基づいて話すこと。

◆場所: 本校舎の空き教室

第1回: 探究教室

第2回: 第二校舎 なでしこホール

◆工夫したこと・苦労したこと

- ①第1回の複数学年が参加した回は、呼んでほしい名前をシールに書いて貼らせた(実践者も同様)。
- ②発言者が重ならないようにコミュニケーションボールを使って、話す人を明らかにした。
- ③実施場所については、対話に集中できるように普段あまり使わない(ほかの生徒が立ち入らない)場所を選んだ。
- ④ファシリテーターとして工夫したこと
 - 1)できるだけ多くの人が発言できるように、まんべんなく発言を促した。
 - 2)意見が偏ったり、停滞したときは拡散させたり、少しずつしたりした。
例)「今、〇〇についてたくさん意見が出ているけど、他の視点や、考えたことはある?」「自分が当事者だったら、どのように考える?」
 - 3)適宜発言を整理したり、言い換えたりすることで、言葉の誤解やブレのないように心がけた。
例)「〇〇な状態って例えば〇〇ってこと?」「言い換えるとこんな感じ?」

取得データおよび検証方法

＜取得データ＞

それぞれの回の生徒の発言・対話後の振り返りコメント

第1回(6/27(木) 中2:2名 高3:6名)

テーマ:「予防的正義はアリか」

第2回(2/07(金) 高3:8名)

テーマ:「日本は未成年のSNSを規制すべきか」

＜検証方法＞

高等部生徒の発言・振り返り

結果

＜データより(一部)＞

①生徒の発言

第1回(6/27(木) 中2:2名 高3:6名)

中2:「人びとの規制が強くなるのはよくない」

「取り返しがつかないことになるので、賛成」

高3:「頭の中のこと(思っただけのこと)を規制されるのは、思想の自由に反する」

「起こったこと以外のことに責任を負うのは納得できない」

第2回(2/07(金) 高3:8名)

高3:「誹謗・中傷の温床になっている(から賛成)」

→子どもだけの問題か?

→SNS発達以前からいじめなどはあるのでは?

「新しい技術や知識を得る手段でもあるので、反対」

→その信ぴょう性については? 有名人の言葉は正しい?

②振り返りコメント(第1回 一部)

中2:「今回のテーマで最初は反対だったのですが、賛成や中立の意見を聞いて更に考えさせられ、自分の考えが深まっていくのが実感でき、わくわくしました。」

高3:「予防的正義が行き過ぎてしまった場合においては、そもそも「なぜ犯罪を犯してはならないのか」という根本の倫理観の崩壊に繋がりがねないと感じた。予防的正義によって拘束されたくないから、社会的な地位を失いたくないからという理由で犯罪を抑止するというのは、犯罪の根本的な解決にはならず、将来的には逆に犯罪件数が増えてしまうのではないかと思った。」

⇒高校生は

1)学んだことを踏まえて自分の言葉で語る?

2)他者の話したことを参考にしながら、自分の言葉で語っている?

3)具体的なことから抽象的なことへ類推している?

考察と今後の課題

◆このような取り組みを面白いと思える生徒は総じて、「考えることや他者の意見を聞くことが楽しい」、「答えのない問いに向き合うことが好き」であることを再確認した。

◆第1回のように異学年の意見を聴くことで、「自分の言いたかったことが言葉化された」といった声もあり、結果として学び合いになった。

◆高3にもなると、授業等で学んだことを活かしながら自分の言葉で語ることができるようになってきている場面も多くみられた。また、他の参加者の意見を参考にしながら、自分の意見に取り入れたり、反駁したりするなど、対話の活性化に貢献していた。

◆今回の対話で大切にしたルール⑥の「本に書いてあった」などの知識ではなく、自分の経験を語ることで、(予定調和の答えではない)自分にとっての意味や主張を話すことを促した。

⇒自分にとっての学ぶ意味などを考えるきっかけになるとよい。

◆高学年ほど、語彙はもちろん普段の授業や自分の経験から徐々に抽象度を上げて(自分のこと→社会のことなど)語ることができるという実感を得た。今後は生徒がファシリテートしたり、教員なしでもこうしたことが自発的に行われるような場づくりについて考えたい。